平野國臣（ひらのくにおみ）

勤皇の黒田藩士

【この偉人への手がかり】

明治維新後に出来た新政府の中心は薩長土肥四藩の出身で占められました。黒田藩の藩士は、慶応元年（一八六五）に藩で起こった内紛で筑前勤皇党の藩士たちが切腹七名、斬首十四名など百名を超える処刑者を出したため、その後の歴史に目を見張る活躍は出来ませんでした。そんな中で勤皇党の先駆としてひとり平野國臣だけは歴史に明らかな跡を刻みました。中央区の西公園に國臣の英姿を偲ばせる大きな銅像が立っています。

日本の危機への目ざめ

平野國臣は、文政十一年（一八二八）に、福岡藩の足軽の子として生まれました。國臣は小さい頃から、正義感が強く、勇気にあふれていました。町で弱い者いじめに出会うと、いじめっ子が自分より強そうに見える場合にでも、かならずいじめっ子に挑みました。たとえ自分が負けたって弱音は一切吐きませんでした。

十四歳の時に、小金丸彦六という足軽の家に養子として貰われました。その後、十八歳で黒田家の土木営繕の小役人となり、十九歳の時に、十一代藩主黒田長溥（ながひろ）の参勤交代のお供として、江戸に行役（こうえき）（出張）しました。長溥は薩摩藩第八代藩主島津重豪（しげひで）の十三男です。

嘉永（かえい）元年（一八四八）、江戸勤めの任期が終わり福岡に帰った後に、小金丸家の娘と結婚し、翌年には子どもも生まれました。この頃から國臣は、儒者や国学者から学問を学び文章も書くようになりました。國臣の目は次第に、自分が仕えている黒田藩という小さな世界ではなく日本という国全体、そしてその日本を包んでいる世界に向かって開かれて行くようになったのです。嘉永四年に薩摩藩士北条右門に出会ってから、それまでは家庭的だった國臣はすっかり人が変わってしまいました。北条の影響を受け、志士として必要な文武両面の教養を身に付けることに多くの時間を割くようになりました。

嘉永六年、アメリカのペリーが黒船四隻を率いて、浦賀にやって来ます。これ以後、外国の船が次々に日本に来るようになりました。

安政二年（一八五五）、國臣が二十八歳の時に、今度は長崎に行役しました。この長崎滞在中、イギリスやフランスの軍艦が長崎によく入港し、江戸からやって来た幕府の役人の応対を見聞することになりました。幕府の役人は、意味もなく外国人を怖がって、彼らの言うがままでした。國臣はそれを目の当たりにして、怒りを抑えることが出来ませんでした。「どうして、同じ人間であるのに異国人の言うことに従わないといけないのだ」

長崎から帰ると、國臣は狂ったような格好をして街の中を徘徊（はいかい）するようになりました。これには養父も妻も、果ては子どもたちまでがあきれて、國臣に離縁の話を持ち出しました。そして三十歳の時に國臣は妻子に愛情を抱きつつも、家族と離縁をしました。黒田藩という枠を超えて行動を起こす上で、家族が処罰されるのを防ぐためわざと取った態度と云われています。そして安政五年、とうとう國臣は脱藩をして、京都に向かってかけ出しました。

京都に着くと、國臣は北条が泊っている宿を訪ねました。北条は國臣を見るなり、「お主（ぬし）、今度の上洛（じょうらく）は何用じゃ」とぶっきら棒に尋ねたので、「何用？　北条さん、あんたはわしに京都に早う出て来い、といったことをまさかお忘れではあるまい」と切り返しました。北条は自分の仲間が京都に来てくれたとあって、喜びました。そして、夜中になって北条が國臣に向かって「あんたに会わせたい人がいる」と言って、他の部屋に連れて行きました。

國臣が名乗ろうとすると、その人物は、

「北条どんからかねて聞いております。平野さんでごわしょう。おいどんは、西郷隆盛でごわす。何とぞご懇意にお願い申す」

と丁寧に挨拶をしました。そして続けて、

「平野さん、お前さまに折り入って頼みたいことがありもうす。福岡藩が御国のためになるように働いてくださらんでごわしょうか」

「西郷さん、やりましょう。やらせてもらいましょう」

と一晩のうちに意気投合しました。実はその頃の西郷は、藩主の島津斉彬（なりあきら）が急死し、悲しみに耐えていたのです。

北条は國臣に西郷を紹介するとすぐに江戸に旅立って行きました。國臣は西郷の願い通り、福岡に帰ることにしましたが、脱藩した身とあって、隠密に黒田藩に戻りました。

西郷と月照

九月になって、安政の大獄が始まりました。京都の清水寺成就院の住職であった月照（げっしょう）の命が狙われ始めました。月照は、大老井伊直弼が、朝廷の許しを待たずに外国と通商条約を結んだことに腹を立て、天皇から水戸藩へ密勅をくだす計画の、影の立役者として大活躍したからでした。

勤皇（きんのう）の公家（くげ）に仕える者から、「月照さんが狙われているから、どこか安全なところに逃がしてくれるように」と頼まれた西郷は、自分の身も危なかったので、月照を連れて、國臣のいる福岡に向かいました。西郷はそこで國臣に月照を預けて、自分は国元の様子を見るために、鹿児島へ向かいました。しかし薩摩藩は、藩主斉彬が死んでからはすっかりと空気が変わってしまい、幕府の鼻息を窺（うかが）っている有様でした。月照の人相書が薩摩藩にも回っており、西郷は絶望の淵に立たされました。

そこに國臣が、月照を連れて鹿児島にやって来ました。薩摩の重臣たちはその情報を手に入れ、西郷を呼び出しました。そして、「今夜のうちに月照を日向（ひゅうが）（宮崎県）へ送り、その途中、国境（くにざかい）で斬って

しまえ」という命令を伝えました。西郷は窮しました。

ひそかに死を決した西郷は、暗い心で國臣と月照の泊っている宿に戻って来ました。そして、國臣が席を外した時に、西郷は藩の命令を月照に伝えました。國臣が戻ってくると、月照は悲壮感の漂う声で、

「これから、急に日向に行くことになりましたよ」

宿屋を出た三人は浜へ急ぎました。そこには船役人が来ていて、すでに船の支度が出来ていました。その日は、澄み渡った月夜でした。安政五年十一月十六日（新暦の十二月二十日）のことです。

船は追い風を受けて進み、西郷は持って来た酒を取り出して、月照と國臣に勧めました。やがて月が雲間に入って少し暗くなった瞬間に、月照と西郷は立ち上がって、冷たい海に飛び込みました。

「しまった――」

國臣は立ち上がって、すぐに舟板を投げ込み、帆綱を切らせました。急いで漕ぎ戻し辺りを捜すうち、しっかり抱き合ったままの二人の姿が、海面に出て来ました。國臣は必死で二人を引き揚げて介抱しました。残念ながら月照は遂に蘇生しませんでしたが、西郷は命を吹き返しました。

明治維新のさきがけ

薩摩藩を追い出された國臣は再び黒田藩に戻りました。水戸藩の浪士たちが井伊直弼を襲撃するという計画を知り、これから日本が難しくなると予想しました。そして西郷との約束を守るために、北条を通じて黒田藩に非常事態に備えるべきとの建白書を提出しました。

その後、桜田門外の変が起こりました。國臣の得た情報通り井伊直弼は水戸藩の浪士に襲撃されて、殺害されました。そこで黒田藩は事前に情報を手に入れていた國臣を危険視して捕らえようとしました。黒田藩に入れなくなった國臣は再び、匿ってもらうために薩摩藩を目指しました。ところが薩摩藩の入口まで来た時に、頼りとしようと思っていた、西郷の親友である大久保利通に断られて、薩摩藩に入国することが出来ませんでした。國臣は絶望しました。薩摩藩の優柔不断に対する怒りが、腹の底から桜島の噴煙のように噴出して来ました。

我が胸の燃ゆる思ひにくらぶれば煙はうすし桜島山

仕方がないので、國臣は天草の牛深で、寺子屋を開きながら生活を送りました。ここで國臣は、尊皇攘夷を断行すべきことを記した「尊攘英断録」を書き上げました。國臣はそれを携えて、再び薩摩藩に入藩することを目指しました。偽名を使って黒田藩の使者として、英断録を当時薩摩藩の最高実力者であった島津久光に提出しました。この「英断録」がきっかけとなって、薩摩藩の空気が変わり、倒幕への動きが日本全国で活発化しました。この時國臣は亡くなった月照の墓を訪れ、墓前で一首詠みました。

ながらへばかに斯く命あるものを過ぎにし人の心短さ

國臣は文久三年（一八六三）但馬国（兵庫県）生野で倒幕の兵を挙げますが、失敗し、翌年斬首されたために、大政奉還を自分の目で見ることは出来ませんでした。しかしながら、國臣の水面下の努力が倒幕の火をつけ、明治維新の実現に大きく貢献したことは間違いありません。

【偉人をしのぶ言葉】

「君が世の安けかりせばかねてより身は花守となりけむものを」

「吾がこころ岩木と人や思ふらむ世のため捨てしあたら妻子を」

（以上、平野國臣の和歌『日本思想の系譜』）